

論文

英語の発音指導について On Teaching the Pronunciation of English

太田 正之*
OTA Masayuki

キーワード：英語、日本語、発音指導、国際共通語

1 はじめに

中学校から始まる教科としての「外国語（実質的には英語）」の学習につながるよう、「コミュニケーション能力の素地」をはぐぐむことを目的に平成23年度より小学校において「外国語（実質的には英語）活動」が正式に始まった。そこでは5年生および6年生が英語を用いた様々な活動をとおして、言語や文化に対する理解を深めたり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成したり、音声や基本的な表現に慣れ親しむことになる¹。すでに5年生から英語の音声を聞いたり、口頭練習などをおこなっているわけであるが、生徒達がモデルとすべき英語についての記述は特に見当たらない。グローバル化、国際協力、人材育成における国際競争力等々が今回の小学校における「外国語活動」導入を大きく後押ししていることは確かであろう。広く世界に目を向ければ、英語はもはや英語母語話者だけのものではないという流れもあり、英語母語話者をはるかに上回る数の英語を母語としない英語使用者が存在し、英語母語話者でないもの同士が英語でコミュニケーションをおこなっている実態が存在する。本稿ではこのような状況に鑑み、英語によるコミュニケーションの重要な要素である音声を取り上げ、日本に相応しい手本とすべき発音モデル像を考えてみたい。

* 新潟県立大学国際地域学部 (mota@unii.ac.jp)

2 国際共通語としての英語

英語を第二言語 (English as a second language, ESL)、または外国語 (English as a foreign language, EFL) として使う人の数は英語を母語 (English as a native language, ENL) とする人の数を大きく上回っている²。また外国語としての英語は、本来英語を母語とする人々とのコミュニケーションが前提とされてきたが、最近では英語を母語としない人々との共通のコミュニケーション手段として英語を使う必要性も加わってきている (Jenkins 2009: 41)。つまり英語が国際共通語 (English as a lingua franca, ELF) として使用されている状況が存在しているのである。そして使用者が増え、使用域が広がるにつれ、英語も変わりつつある。このような変化を極めて自然な言語過程と捉える見方もある (Jenkins 2009: 43)。母語である英語と母語でない英語が各地で使用され、それぞれの英語には地域的ななまりや母語からの影響を大きく受けた特徴などが含まれているのが現状である。

しかし国際共通語としての英語の重要性を考えると、英語の過度の多様性は、相互理解を妨げる原因となり、国際共通語としての英語の位置づけにも関わる問題である。ここで重要なのは使用する英語が理解できる、あるいはわかりやすい (intelligible) ものであるということである。このことを念頭に、非英語母語話者 (Non-native speakers of English, NNS) 同士の実際の英語使用に関する資料を収集・分析し、音声面においてコミュニケーションを阻害する要素・特徴などについて研究が行われている。この研究の最終目標は、国際共通語としての英語において使用されるべき最も重要な音韻 (Lingua Franca Core, LFC) の特定である。しかしこのような動きには、母語である英語が英語教育の絶対的な基準であり、そこからの逸脱はすべて誤りであり好ましくないとする考えが支配的であったことに対する疑念があり、加えて非英語母語話者のアイデンティティの問題も関わっている。ただこれを扱うことは本稿の範囲を超えることでありこれ以上の深入りはしない。

最後に、なぜ国際共通語としての英語において音声面における阻害因子を排除することが重要なのかに触れたい。Jenkins (2000, 2009) ならびに本稿で想定されている国際共通語としての英語使用者は、二言語使用英語話者 (Bilingual English speaker, BES) や英語母語話者 (Native speaker of English, NS) ではなく、二言語使用者のレベルに達しない英語話者 (Non-bilingual English speaker, NBES) である。英語母語話者や二言語使用英語話者であれば、話し相手の発音上の間違い、例えば本来とは異なる音声に置き換えてしまったり、ある部分の音声を脱落させたり、余分な音声を加えてしまうなどしても、言語内外の情報を手がかりに補正やさまざまな調整を行い正しい解釈へたどり着くことが可能な場合が多い。しかしここで想定されている英語使用者 (NBES) は、たとえかなりのレベルに達していても、上記のようなtop-down的処理は困難で、個々の発音の認識から始めるbottom-up的処理に頼らざるを得ない状況にある (Jenkins 2000: 80)。英語運用能力の高くない話者

の場合は、bottom-up的処理への依存度はさらに大きくなることは明らかであろう。音声認識段階での誤りを後で修正・訂正することは極めて難しい。国際共通語して英語が使用される状況で効果的なコミュニケーションを成立させるためには、あらかじめその阻害因子ともなる音声関連の問題を取り除くことが必要不可欠である所以である。阻害因子解明の先にしかLFCは見えてこないのである。

3 英語母語話者からみた日本人英語の発音

本節では日本人の英語もしくは日本語を母語とする英語話者の発音のどのような部分が、英語母語者の理解を妨げる可能性があるのかを、Thompson(2001)に従い概観する。この論考が収録されているSwan and Smith(2001)は主としてイギリス英語母語話者が外国語として英語を教授する場合に役立つように22の異なる言語を母語とする英語学習者に見られる誤りの傾向をまとめたものである。

まず日本語は英語に比べ母音の数が少なく、音節構造はCV (C (consonant : 子音) + V (vowel : 母音))、V (母音のみ) が基本であり子音連鎖はまれであることから、日本人英語学習者は英語音声の調音や受容が困難であることが多いと指摘する。以下、Thompson(2001)で日本語を母語とする英語話者の音声に関し最も顕著な問題としてとりあげられている母音、子音を順にみていこう。

母音に関する問題は、母音の数、すなわち種類の相違が原因とおもわれるものと、日本語音声に特徴的な調音上の性質が維持されるがためにおこるものに分かれるようである。前者のケースは/ɔ:/や/əʊ/が[o:]と発音されることでcaught/ɔ:/, coat/əʊ/の区別があいまいになる場合である。また日本語にはない/æ/, /ʌ/は日本語の「ア」に近い[a]に置き換えられlack[æ], luck[ʌ]の区別がつかなくなることもある。同様に/ɜ:/と/ə/がともに[ɑ:]となることで本来の違いが中和される場合がある。また二重母音の第二要素として現れる/ə/、例えばthere/ðeə/の/ə/が[ɑ:]となることもある。以上のような例は、英語では本来質の異なる母音であるが、母音の少ない日本語ではその違いを維持するだけの音声資源がないために起こりうる問題といえる。

一方、音声的に類似している場合であっても、調音方法の一部が変わることで理解が困難となる場合もある。よく知られているように、日本語では高母音の/i/, /u/が前後を無声子音で挟まれると本来有声音である二つの母音が無声化する³。例えば、kiku(菊)は[kiku]のように下線部では声帯の振動がなく無声音となる。この無声化を英語の発音に持ち込むと理解が困難となるようである。また日本語の/u/では顕著な円唇化がみとめられないため、英語の/u:/においても非円唇になりやすいようで、usual, tooなどの発音では円唇を心がける必要がある。

子音はどうであろうか。日本語にない子音の場合には似た響きの日本語の子音に置き換えられることが多い。まず英語の /l/, /r/ はともに日本語の [r] になりやすく、その結果 *glamour* : *grammar*, *election* : *erection* の区別がつかなくなる。唇歯音 /θ/, /ð/ は、それぞれ [s] と [ʃ], [z] と [dʒ] に置き換わる。very が berry に聞こえるように、/v/ は [b] として発音される。一方、後続音の影響を大きく受けて変わる子音もある。/h/ は /u:/ が後続する場合には両唇摩擦音 [ɸ]⁴ に、/i:/ が後に続く場合には [ʃ] に聞こえることもある。この [ʃ] に似た /h/ により、*he*, *she* の区別が困難となることがある。さらに日本語にない唇歯摩擦音 /f/ も /ɔ:/ が後に来る場合には、ほぼ [h] となるため、*force* は *horse* と聞こえる。また /t d s z/ などの歯茎音も /i/, /i:/ の前で口蓋音化を受け [tʃ dʒ ʃ dʒ] などへと変わることが多い。/t d/ はしばしば /ʊ/, /u:/ の前で [ts dʒ] へと変化する。鼻音 /n/ も環境に応じて変化するようである。例えば、母音が先行する場合にはその母音が鼻音化し、消えてしまうこともある⁵。文脈次第で [m], [N] になることもある。最後に英語母語話者にとって問題となる可能性を指摘された母音・子音を以下に再掲する。

- (1) a. /ɔ:/, /əʊ/ ([o:] : *caught* = *coat*)
 /æ/, /ʌ/ ([a] : *lack* = *luck*)
 /ɜ:/, /ə/ ([ɹ])
 /i/, /u/ (前後に無声子音がある場合に無声化 : *Chicago*)
- b. /l/, /r/ (日本語の [r] : *glamour* = *grammar*)
 /θ/, /ð/ ([s ʃ], [z dʒ])
 /v/ ([b] : *very* = *berry*)
 /h/ (/u:/ が後続 : 両唇摩擦音 [ɸ], /i:/ が後続 : [ʃ] > *he* = *she*)
 /f/ (/ɔ:/ が後続 : [h] > *force* = *horse*)
 /t d s z/ (/i/, /i:/ が後続 : [tʃ dʒ ʃ dʒ])
 /t d/ (/ʊ/, /u:/ が後続 : [ts dʒ])
 /n/ ([m], [N])

Collins and Mees (2009) は母語話者のような発音習得を目標とすることには無理があり、達成可能な現実的な目標を立てることが賢明であると主張する。具体的に言えば、聞き手にとってわかりやすい発音、聞き手をいらいらさせたり混乱させたりすることのない発音を身に付けることが目標としては妥当であるとする。事実発音に関する間違いには無視しても良いようなものから、理解を大きく妨げるものまで種々雑多である。このような発音上のさまざまな間違いを、聞き手にとってのわかりやすさ (*intelligible to your listeners*) という観点から見直し、以下に示すような三つのレベルに分類している。

(2) a. わかりやすさを阻害する間違い

音素対立の混同: /ɪ - i:/, /ɜ: - a:/など

硬音・軟音 (fortis/lenis) の混同: とりわけ語末位置で、/f - v/など
子音連鎖

重要な子音対立: 日本語母語話者にとっては /f - h/, /l - r/

/h/の脱落

語強勢: とりわけ語頭以外の位置

b. いらいらさせたり、おもしろがらせたりする間違い

/r/の調音: 英語とは違う調音、フランス語やドイツ語の /ʁ/ など

歯摩擦音 /θ/, /ð/: 別な音への置き換え、/t/, /d/, /z/ など

l のグループほど重要でない母音の区別: /u: - ʊ/, /ɒ - ɔ:/

/l/の異音の不適切な位置での使用: すべての生起位置での [ɫ] 又は [ɰ]

弱形 (weak forms) や縮約形 (contracted forms) など

c. ほとんど反応がなかったり気づかれない間違い

イントネーション

音節主音的子音の欠如: bacon [beɪkɹ̥] が [beɪkən] となるなど

複合語強勢: ˈblack ˌboard が、ˌblack ˈboard となるなど

相手が英語母語話者であるかどうかにかかわらず、英語によるコミュニケーションを成立させるためには、すくなくとも (2a) のグループに含まれる事項はすべて正しく習得することが必須であろう。より円滑な意思疎通を目指すならさらに (2b) のグループの事項を習得するというように、望むレベルに応じて音声面を強化することが可能であるというわけである。基礎レベルにある英語学習者には (2c) にある音節主音的子音の正しい発音を求める前に、もっと時間を割いて取り組むべき事項があるということを示しているのである。

4 国際共通語としての英語 (ELF) から見た日本語母語話者の英語

前節では英語母語話者の視点から日本語母語話者の英語発音のどこが問題になりやすいかを概観した。本節では国際共通語としての英語が使用される状況では、日本語母語話者の発音のどのような部分が問題になりやすいかを、主に Walker (2009) に従いみてゆくことにする。特に注意が必要とされる子音を次に示す。

- (3) /r/, /l/
 /s/, /z/, /t/, /d/, /h/ (/i/が後続する場合)
 /n/⁶ (特に語末位置)
 /p/, /t/, /k/

まず/r/, /l/だが、日本語には側音/l/は存在しない。加えて日本語の/r/は、英語とは調音方法が異なり舌尖が歯茎と接触する。しかしながら、接触している時間は英語の/l/ほど長くはないので、/r/と/l/の中間音のような響きとなるため、本来異なる二つの音の区別がなくなることである。これは日本語が母語である英語話者にとっても発音・聞き取りとも難しいことが指摘されている。次は日本語に特有の硬口蓋音化、または口蓋化が関わる子音である。前節でも指摘されていたように、/i/や/u/といった舌の位置が高い前舌母音が後続する場合に、この母音の影響を受けて前の子音の調音の際に硬口蓋に向かって舌が盛り上がる現象である。その結果/t/は[tʃ]となることが多く、例えばtipやteaseがchip, cheeseに聞こえることになる。その結果理解を妨げる可能性が生じる。/n/はELFで問題となることは普通ないのだが、日本語特有の口蓋垂鼻音[N]に置き換わると/n/が省略されているように聞こえるために注意が必要とされる。また英語の無声破裂音/p/, /t/, /k/に関しては、語頭などで見られる強い氣息、つまり閉鎖解放直後の強い息の流出が見られ、これが/p/と/b/を区別する重要な特徴となっている。しかし日本語ではさほど強い氣息は認められないことから、氣息の弱い日本語の[p]に置き換えてしまうと[b]に聞こえてしまうことで、聞き手を混乱させる可能性がある。他の二つの子音/t/, /k/も同様である。

最後に子音連鎖をとりあげる。日本語では子音連鎖はまれであることから、それぞれの子音の後に母音を入れてしまう。その際、連続する子音が省略されずにすべて保持されることになれば本来の語が持つ音韻的な長さを大きく上回ることになり、それが原因で理解に影響が及ぶ可能性がある。(3)にはないが、/f/や/v/などは日本語には存在しない音なので調音点などしっかりと理解しておく必要はあると思われる。Walker (2009) では母音などへの具体的な言及はみられない。これは英語の音声とほぼ同等もしくは類似している音声日本語にあり、日本語の音声に置き換わってもELFの環境ではさしたる問題にはならないとの認識があるようである。

5 国際共通語としての英語から見た英語母語話者の英語

Jenkins (2009:45) では国際共通語としての英語使用 (ELF) 下では、英語母語話者の英語の特徴のうちいくつかはELFでのコミュニケーションに支障をきたすものであることを指摘している。すなわち弱形 (weak forms)、脱落 (elision)、同化 (assimilation) などといっ

た、一定の速度で音声が続く場合に起こる現象、別な言い方をすればごく自然な会話で認められる音韻現象が理解を阻害するというのである。このような現象を含む英語に十分慣れていない場合には、実際の音声を出発点として本来の形式を復元する作業が困難であるためである。このような連続する音声に特有の弱化ともいえる現象は、英語母語話者とのコミュニケーションを数多く経験したり、英語音声学を学んだり適切な発音指導などを受けたりしなければ理解・習得できない部分であろう。

また英語母語話者の英語の特徴の中でも、聞き手へのわかりやすさに影響を及ぼすわけでもなく、かといって理解を容易にしてくれるわけでもないものもある。歯摩擦音の/θ/, /ð/である。東アジアのELF使用下では多くの場合、/s/, /z/や/t/, /d/などに置き換わっており、このことが原因で問題が生じた事例はないということである。またJenkins (2000: 137) では日本語を母語とする英語話者の[t]が[θ]と解釈されたり、イギリス各地では歯摩擦音/θ/, /ð/の異音である歯閉鎖音[t], [d]も使用されている。語強勢の位置や英語の基本リズムである強勢拍リズムなども、ELFが使用される状況では英語母語話者のそれと違うからといって問題とはならないようである。

6 日本語母語話者への英語発音指導をどうするか

前節までの内容を踏まえ、本節では日本語を母語とする英語学習者に対する英語発音指導の内容を、いくつかの段階に分けて考えてみたい。まず「外国語活動」が始まる小学校段階では、指導者は多くの場合、英語科教員免許をもっておらず、従って英語音声学のような英語の音声に関する教育や訓練を受けていない。従って英語母語話者の音声的特徴をすべて正確に生徒に実践してみせたり、適切な発音をすることができないこともあろう。しかし実際その必要はない。この段階では指導者はELFに求められる部分を理解し習得に努めることで十分とする。この指導者の姿と英語が生徒にとり、日本語を母語とする一番身近なELF使用者のモデルとなりうるのである。(2b) や (2c) で扱われている事項などは不要であり、求められるのは国際共通語としての英語コミュニケーションの核ともなりうる部分、(2a) の事項 (ただし前節で指摘されたように語強勢や、この後扱う子音連鎖などは除く) などが候補となるだろう。ただ (2a) にある子音連鎖に関していえば、母語にない、あるいは母語では許されない連鎖に対する一般的な対処法は、母語で許容される数まで子音を減らすか、母語の音節のパターンに合うよう母音を挿入するか、またはその両方かである。Jenkins (2009:45) によれば、連続する子音の一部を発音しないで、例えば product/prɒdʌkt/ の /t/ を落として [prɒdʌk] のように発音した場合、同じような連鎖回避方法をとらない母語を持つELF話者は理解するのが困難であった。他方、日本語を母語とする英語話者によく見られる連続する子音はすべて維持しつつも、それぞれの子音の後に母音

を加えた[pærɔrdʌkʊtɔ]では、そのような理解を妨げるような影響はなかったとある。現時点ではJenkinsなどが目指すLFC（国際共通語としての英語の最も重要な部分）は残念ながら全貌が明らかにされていない。十分なデータに基づく有意義な研究結果を待ちたい。

現時点での日本では英語は「外国語としての英語」という側面が強く、このことについても何らかの配慮が必要であろう。つまり（2a）から（2b）、（2c）へと進むにつれて英語母語話者の英語に近い特徴を備えた英語となるわけで、本格的な教科としての外国語である英語を学ぶ段階では、極めて重要な（2a）の習得を確認しつつ（2b）、（2c）に分類される音声特徴の習得を目指すのである。幸い新しい指導要領では中学校での授業時間も年間105時間から140時間に増えることから、増加部分の一部を使い国際共通語としての英語という視点を取り入れた音声指導を実施すべきではないだろうか。「使える」英語の定義はともかく、英語の置かれた現状を考慮に入れるとELFは避けては通れない。わかりやすさを一つの目安とした体系的な音声指導こそ「使える」英語への第一歩ではなからうか。

7 まとめ

本稿では習得すべき英語の音声の特徴について、いくつかの異なる考え方を概観した。その中で「外国語としての英語」という視点に加え、現在の英語の置かれた状況を反映する「国際共通語としての英語」という視点を取り入れた日本語を母語とする英語学習者への発音指導について提案をおこなった。今後はLFCの特定を待ちつつ、具体的な教材などを含めたさらに綿密な指導法を考えていきたい。

注

1. 詳細は文部科学省の小学校学習指導要領ならびに小学校学習指導要領解説外国語活動編を参照のこと：http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/news-cs/youryou/index.htm
2. 詳細はCrystal(1997)を参照。
3. 他に末尾の「ス」の母音部/u/が無声化しやすい。神山(2008)、桜井茂治(1998)を参照のこと。
4. 日本語の「フ」の子音/f/については英語に限らず[f h]などとの混乱を誘発する可能性がある(神山2008:76)。
5. 日本語でも「かんあん(勘案)」、「さんいん(山陰)」、「あんうん(暗雲)」などの「ん」は鼻母音になっていることに注意。詳細は神山(2008:42)を参照されたい。
6. Walker(2009)では口蓋化により影響を受ける子音として/s z t d h/とひとまとめにされているが、/n/については口蓋化の事例は示されていない。(2)で示したように語末位置で日本語の/N/に置き換わるが多く、その結果in an hourやon airなどでは/n/が落とされているような印象を与えてしまうことから本稿では/s z t d h/とは別に扱っている。

参考文献

- Collins, B. and I. M. Mees. 2009. *Practical Phonetics and Phonology*. 2nd ed. Routledge.
- Crystal, D. 1997. *English as a Global Language*. Cambridge University Press.
- 今井邦彦. 2007. 『ファンダメンタル音声学』 ひつじ書房.
- Jenkins, J. 2000. *The Phonology of English as an International Language*. Oxford University Press.
- Jenkins, J. 2009. 'Understanding Englishes' in Murata, K. and J. Jenkins (eds): *Global Englishes in Asian Context*. Palgrave Macmillan.
- 神山孝夫. 2008. 『脱・日本語なまり』 大阪大学出版会.
- Lane, L. 2010. *Tips for Teaching Pronunciation: A Practical Approach*. Pearson Longman.
- 桜井茂治. 1998. 「共通語の発音で注意すること」『NHK 日本語発音アクセント辞典』 NHK放送文化研究所・編.
- Taylor, D. S. 1991. "Who speaks English to whom? The question of teaching English pronunciation for global communication." *System*. Vol. 19 No. 4: 425-435.
- Thompson, I. 2001. "Japanese speakers" in M. Swan and B. Smith (eds.): *Learner English*. 2nd ed. Cambridge University Press.
- Walker, R. 2010. *Teaching the Pronunciation of English as a Lingua Franca*. Oxford University Press.